

吃音のある子どもを持つ保護者のための セルフヘルプ グループに関する研究と今後の課題

堅田利明

(関西外国語大学)

KEY WORDS: 吃音児 保護者支援 セルフヘルプ グループ

1 はじめに

吃音当事者の支援に言友会(特定非営利法人全国言友会連絡協議会)が大きな役割を果たしてきた。各会によって活動方針に多少の違いはあるものの、セルフヘルプ グループ(以下 SHG)としての機能を果たしている。さらに、成人吃音者のみならず小中高生を対象とした活動にも取り組んでいる会もある。主役は吃音児であるが、未成年の場合、保護者同伴の参加となり、吃音の啓発を目的に、保護者にも会への参加を積極的に奨励しているところもある。しかし、吃音児が自由に意見を述べられるよう保護者は席をはずした方が良いのではないかと、といった思いや、当事者から子育ての方法を問われ、非難されているような心境に陥り、辛くなってしまったという意見も聞かれる。

近年、保護者の抱える悩みや不安の軽減を目的とした当事者とは別立ての会として、保護者同士が話し・聴く場を主宰する動きが出てきた。小中高生対象の言友会活動と平行しながら、保護者だけが集える場を別に設けているところもある。主宰者は、場を設けるにあたっての必然性について、一定の見解を有するものと想像できるが、その内容を整理し、機能や意義について学術的に検討した報告は見当たらない。

筆者は、言語聴覚士として前勤務地の病院で、吃音のある子どもやその保護者・家族と出会ってきた。吃音の臨床は、当事者へのかかわりはもちろん、保護者や家族への吃音の知識や情報提供が重要であると考えている。筆者は「吃音ガイダンス」と称し、就学前の子どもにも、家族にも、対象に合わせた説明をできるだけ早期に、丁寧に実施してきた。親子共にそれだけで安心し、様子を見たいと親自ら申しでる場合もあった。当然、ガイダンスだけで完結するものではなく、以後の臨床が重要ではあるが、その時々で必要と考えられる吃音の知識・情報を得た上での経過観察や直接指導を必要とする場合であっても吃音臨床の柱になると考える。

他方、筆者は、個別の吃音臨床と平行して、吃音児や保護者が他の吃音児や保護者と出会える場を設ける必要性にも気づくに至った。吃音児の出会いの場として吃音親子サマースクール(日本吃音臨床研究会主催)と、保護者および家族に対して勤務地で平成9年から年2回、「吃音のある子どもを持つ親の座談会」という名称で会を継続してきた。会場での保護者の発言やアンケートの感想等から会開催の意義が実感される一方で、保護者の SHG としての学術的な調査研究にはまだ至っていない。個別の吃音臨床の場の拡大や吃音の啓発を推し進めていくことと合わせて、もうひとつの吃音理解・情報発信源として、さらに保護者同士のエンパワメントの効果を包含した「吃音のある子どもを持つ保護者の会」の機能や意義について、学術的な調査研究の必要性がある。得られたデータは、活動形態やマネジメント等、会の設立・運営に貢献できるものとなる。

2 研究の目的

本研究では、吃音の SHG に関して本邦においてこれまでどのような研究が報告されてきたのか、その研究対象や方法、結果をレビューすることで、研究の現状と傾向を明らかにし、吃音のある子どもをもつ保護者支援の方法としての SHG の機

能や意義を検討していくための指標を得たいと考える。

3 先行研究のレビューの対象

本研究は、レビューの対象を吃音の SHG に関連する研究に絞り、「吃音児・者、および保護者・家族を支援する目的で実施されている SHG の役割や機能」とした。具体的には、吃音に関連する SHG の実践や、その役割・機能の研究とした。

4 先行研究のレビューの方法

CiNii Articles において、「吃音 AND セルフヘルプ グループ」を検索ワードとし、1993 年から 2016 年に公表された研究を調査した。また、World Cat、JSTOR、ProQuest Research Library、といった検索エンジンを用い、「stuttering AND self-help group AND parent」を検索した。

5 吃音の SHG に関する研究の動向

レビューの結果、我が国の吃音の SHG を主題とする研究はその目的によって、(1)セルフヘルプ グループ活動が成人吃音当事者に及ぼす影響、(2)セルフヘルプ グループ活動が吃音のある子どもの援助に及ぼす影響、(3)セルフヘルプグループ活動が吃音のある子どもとその親の援助に及ぼす影響、(4)セルフヘルプグループメンバーを対象とした吃音当事者の抱える問題について、(5)成人吃音当事者のセルフヘルプグループの現状や今後のあり方について、という5種類に分類できた。最も多く報告されていたのは、SHG 活動が成人吃音当事者に及ぼす影響、および成人吃音当事者の SHG の現状や今後のあり方についての研究であった。一方、SHG 活動が吃音のある子どもや親子の援助に及ぼす影響について検討した研究は少なく、親の SHG に限定してその機能や役割、活動の意義について検討した研究は見当たらなかった。海外においても先行研究を抽出できなかった。

6 先行研究の課題と今後の展望

レビューの結果、吃音の SHG 活動を対象とした研究の少なさ、とりわけ保護者のための SHG に関する研究はみあたらないことが明らかとなった。親のための SHG 活動は、開催される地域の吃音相談窓口の状況や特質、保護者のみの参加とするか専門家を交えるか、ファシリテータの有無、マネジメント、といった要素を検討していく意義がある。また、方法として、結果を量的に示しやすいアンケート調査は分析し易いが、量的な分析だけでは読み取れない部分があり、発言の聴き取りの分析が重要な鍵を握っている可能性もある。研究手法の難しさと労力負担により敬遠されがちないわゆる質的研究とを合わせた分析が必要ではないかと考える。

7 今後の研究課題

現存する吃音児を持つ保護者の会、言友会の親グループの実態を調査し、その機能や意義について焦点を当て、アンケート調査による量的な分析と共に、参加者によって語られた言葉の逐語記録を基に質的分析を加えながら、保護者が集う会の SHG 機能と意義について明らかにし、新たに会の発足を後押しできるデータの蓄積が求められる。(KATADA Toshiaki)